

病害虫発生予察情報（11月予報）

平成28年10月26日

静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (11月の県平均平年値)	予報の根拠
ネギ (シロネギ)	さび病	発生量：並 (発病株率1.2%)	10月中旬発生量：並(発生なし)(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(-)
	黒斑病・葉枯病	発生量：少 (発病株率1.6%)	10月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(-)
	シロイチモジ ヨトウ	発生量：少 (寄生株率0.8%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(-) フェロントラップ誘殺数：やや少(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(+)
	ネギアザミウマ	発生量：やや少 (寄生株率46.9%)	10月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(+)
	ネギハモグリ バエ	発生量：多 (被害株率5.3%)	10月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(+)
キャベツ	黒腐病	発生量：少 (発病株率3.6%)	10月下旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：降水量：並～少ない(-)
	菌核病	発生量：やや多 (発病株率0.04%)	10月下旬発生量：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(-)
	コナガ	発生量：多 (寄生株率0.4%)	10月下旬発生量：多(+) フェロントラップ誘殺数：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(+)
	ハスモンヨトウ	発生量：多 (寄生株率0.1%)	10月下旬発生量：多(+) フェロントラップ誘殺数：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(+)
	オオタバコガ	発生量：やや少 (寄生株率0.6%)	10月下旬発生量：少(-) フェロントラップ誘殺数：やや多(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(+)
	アブラムシ類	発生量：多 (寄生株率2.4%)	10月下旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(+)
ダイコン	黒斑細菌病	発生量：少 (発病株率0.5%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(-)

作物名	病害虫名	予報 (11月の県平均年値)	予報の根拠
ダイコン	白さび病	発生量：少 (発病株率 4.4%)	10月中旬発生量：並(発生なし)(±) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：並～少ない(-)
	モザイク病 (アブラムシ類)	モザイク病発生量：並 (発病株率 0.8%) アブラムシ類発生量：多 (寄生株率 4.9%)	10月中旬発生量 モザイク病：少(発生なし)(-) アブラムシ類：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(+)
	コナガ	発生量：やや少 (寄生株率 0.6%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(-) フェロントラップ誘殺数：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(+)
	ナモグリバエ	発生量：やや少 (寄生株率 21.8%)	10月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(+)
レタス (非結球レタスを 除く)	斑点細菌病	発生量：やや多 (発病株率 0.3%)	10月中旬発生量：並(発生なし)(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(-)
	べと病	発生量：やや少 (発病株率 0.2%)	10月中旬発生量：並(発生なし)(±) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：並～少ない(-)
	ハスモンヨトウ	発生量：やや少 (寄生株率 0.1%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(-) フェロントラップ誘殺数：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(+)
	ナモグリバエ	発生量：やや少 (寄生株率 0.7%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(+)
イチゴ	うどんこ病	発生量：少 (発病株率 3.7%)	10月中下旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(-)
	炭疽病	発生量：多 (発病株率 0.9%)	10月中下旬発生量：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(-)
	アブラムシ類	発生量：やや多 (寄生株率 3.6%)	10月中下旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+)
	ハダニ類	発生量：やや少 (寄生株率 16.2%)	10月中下旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+)
	ハスモンヨトウ	発生量：やや多 (寄生株率 0.4%)	10月中下旬発生量：並(±) フェロントラップ誘殺数：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+)

作物名	病害虫名	予報 (11月の県平均平年値)	予報の根拠
トマト	葉かび病 すすかび病	発生量：やや多 (発病株率 17.7%)	10月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：並 (発病株率 3.7%) コナジラミ類発生量：並 (寄生株率 5.5%)	10月中旬発生量 黄化葉巻病：少(-) コナジラミ類：少(-) 気象予報：気温：高い(+)
	ハスモンヨトウ	発生量：やや少 (寄生株率 0.5%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(-) フェロントラップ誘殺数：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+)
	オオタバコガ	発生量：やや少 (寄生株率 0.01%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(-) フェロントラップ誘殺数：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+)
	ハモグリバエ類	発生量：やや少 (寄生株率 3.2%)	10月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+)
ウンシュウ ミカン	ミカンハダニ	発生量：やや少 (寄生率 2.0%)	10月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(+)
キク (露地)	黒斑病、褐斑病	発生量：並	10月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(-)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

2 予報の根拠と防除対策

【ネギ（シロネギ）】

<生育の概況>

生育の遅延や欠株が一部で認められる。

●さび病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（年平均発病株率0.02%）。本病は、例年11月以降発生が増加する（11月の年平均発病株率1.2%）。
- ・本病は多湿を好み、発病適温は15～20℃である。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、特には助長しない。

防除対策

- ・肥料の過不足は発病を助長するので、施肥を適正に行う。
- ・発病がみられたほ場では早期に薬剤防除を行うとともに、被害茎葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外で土中深くに埋めるなどして適切に処分する。

●黒斑病・葉枯病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、上位3葉の平均発病株率は2.0%（平年5.7%）と平年より少なかった。
- ・黒斑病は多湿を好み、分生子の発芽適温は24～27℃である。また、葉枯病の多発気温は15～20℃である。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、特には助長しない。

防除対策

- ・肥料の過不足は発病を助長するので、施肥を適正に行う。
- ・曇雨天が続く場合には発病する前に予防散布を実施する。

●シロイチモジヨトウ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（年平均寄生株率2.3%）。
- ・10月の予察灯とフェロモントラップによる農林技術研究所内での誘殺成虫数は平年をやや下回った。
- ・1か月予報では、気温は高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生に好適である。

防除対策

- ・例年11月には発生が減少する。卵塊（数粒～数十粒の卵の塊で灰白色の毛に覆われている）や若齢幼虫を見つけた場合は、早急に除去する。被害が続くようであれば、早めに薬剤防除を実施する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は12.4%（平年53.4%）と、発生は平年に比べ少なかった。
- ・1か月予報では、気温は高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生に好適である。

防除対策

- ・多発ほ場では、早めに薬剤防除を実施する。

●ネギハモグリバエ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均被害株率は53.6%（平年26.6%）と、発生は平年に比べ多かった。
- ・例年、気温の低下に伴って11月には発生が減少するが、1か月予報では、気温は高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生に好適で、幼虫による加害が継続する。

防除対策

- ・多発生ほ場では複数回にわたり薬剤防除を実施する。

【キャベツ】

<生育の概況>

多雨と日照不足により、定植の遅れや生育遅延が認められる。

●黒腐病

予報の根拠

- ・10月下旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年平均発病株率0.5%）。
- ・1か月予報では、降水量は平年並～少ないため本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・本病は細菌病で、発病後防除を実施しても進展が止まりにくいことから、予防散布に努める。特に強風雨の前後に薬剤散布を実施すると防除効果が高い。
- ・被害残さは感染源となるため、ほ場外で土中深くに埋めるなどして適切に処分する。

●菌核病

予報の根拠

- ・10月下旬の巡回調査では、平均発病株率0.2%と平年よりもやや多かった（平年発生なし）。本病は例年生育後半に被害が増加する（12月の平年発病株率0.1%）。
- ・本病は、降雨があり、20℃前後の気温が続くと発生しやすい。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・例年発病がみられるほ場では予防的に薬剤防除を行うとともに、被害茎葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外で土中深く（地下50cm以上）に埋める等して適切に処分する。

●コナガ

予報の根拠

- ・10月下旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.8%（平年0.1%）と、発生は平年に比べ多かった。
- ・10月の農林技術研究所内および県内各産地のフェロモントラップによる誘殺成虫数は平年並みで少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生に好適である。

防除対策

- ・結球前の新芽が加害されると芯止まりや品質の低下を招くので、結球前に防除を行う。

- ・薬剤に対する抵抗性が発達しやすいため、同系統剤の連用を避けローテーション散布を心がける。特にピレスロイド系およびジアミド系殺虫剤は薬剤感受性が低下している可能性があるため薬剤の選定には十分注意する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・10月下旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.4%（平年0.7%）と、発生は平年に比べ多かった。
- ・10月のフェロモントラップによる誘殺成虫数は平年をやや上回って推移している。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生に好適である。

防除対策

- ・発生が見られたほ場では、薬剤の効果が高い若齢幼虫のうちに防除する。若齢幼虫は葉裏を加害するため、葉裏にも十分薬液がかかるように散布する。

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・10月下旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.2%（平年0.6%）と、発生は平年に比べ少なかった。
- ・農林技術研究所内における10月のフェロモントラップによる誘殺成虫数は平年に比べやや多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生に好適である。

防除対策

- ・幼虫が結球部を加害するため、結球内に侵入後では薬剤の効果が上がりにくい。例年、発生が見られるほ場では、早めに定期的な防除を行なう。
- ・薬剤に対する抵抗性の発達を防ぐために、同一系統の薬剤を連用しないようにする。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・10月下旬の巡回調査では、平均寄生株率は6.2%（平年1.1%）と、発生は平年に比べ多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生に好適である。

防除対策

- ・本虫は風通しの悪い場所に多く発生することから、例年発生が認められるほ場では発生に注意し、早期に薬剤防除を実施する。
- ・下葉の葉裏に寄生が多いので、寄生部位に薬液が届くようにていねいに散布する。

【ダイコン】

<生育の概況>

生育は平年よりやや遅い～やや早い状況で、地域によってばらつきがある。

●黒斑細菌病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率0.1%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年並～少ないため、本病の発生を特には助長しない

(降雨は本病の発生を助長する。例年、生育後半になると発生が増加する。)

防除対策

- ・生育の衰えは本病の発生を助長するため、肥料切れと排水に注意し、適切な管理に努める。
- ・降雨が続くときや初発生を確認した場合、速やかに薬剤防除を実施する。
- ・病原細菌は、暴風雨等による傷口から侵入するので、暴風雨前または直後に防除を行う。
- ・葉柄基部から侵入した場合は、根部に影響を与え商品価値を落とすこともあるため特に注意する。

●白さび病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった(平年発生なし)。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本病の発生を助長しない(本病は分生子の発芽最適温度が10℃と比較的低温を好む)。

防除対策

- ・白さび病が多発するとワッカ症を併発することがある。ワッカ症を防ぐには、葉での発病が少ないうちに薬剤散布を行う必要がある。
- ・発病残渣は翌年の伝染源となるため、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

●モザイク病(アブラムシ類)

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった(平年0.1%)。
- ・本病の媒介虫であるアブラムシ類は平均寄生株率0.6%(平年0.2%)と平年より発生が多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、アブラムシ類の発生を助長する。

防除対策

- ・雨が降らない日が続くとアブラムシ類が急増する場合があるので、ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。
- ・発病株は伝染源となるため速やかに抜き取り、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

●コナガ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった(平年寄生株率0.2%)。
- ・浜松市および牧之原市のフェロモントラップによる誘殺数は、平年より少なく推移している。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。

●ナモグリバエ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は4.1%(平年8.3%)と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・葉表の白点（産卵痕）や絵描き状の食害痕が多数見られる場合は、防除を実施する。

【レタス（非結球レタスを除く）】

<生育の概況>

天候不良により定植が遅れているほ場が多い。

●斑点細菌病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。
- ・1か月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する（降雨は本病の発生を助長する。例年、生育後半になると発生が増加する。）。

防除対策

- ・本病は主に結球期以降に発生するが、結球前も葉面の病原細菌数を減らしておく必要があるため、結球期に入る前に薬剤の予防散布をすることが大切である。
- ・降雨が続くときや初発生を確認した場合、速やかに薬剤防除を実施する。
- ・病原細菌は、暴風雨等による傷口から侵入するので、暴風雨前または直後に防除を行う。
- ・トンネル被覆後はできるだけ換気につとめ、気温の上がり過ぎや過湿にならないように努める。

●べと病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本病の発生を助長しない（多湿は本病の発生を助長する。また、病原菌の生育適温は10～15℃で比較的低温を好む）。

防除対策

- ・予防散布に努める。初発生を確認した場合は、速やかに薬剤防除を実施する。
- ・トンネル被覆後は、過湿にならないよう換気に努める。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、確認されなかった（平年寄生株率0.1%）。
- ・フェロモントラップの誘殺数は、平年よりやや多く推移している。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・例年、11月末まで幼虫が発生するので、ほ場での発生に注意し、防除効果の高い若齢幼虫期の防除に努める。なお、育苗期後半または定植時に薬剤処理した場合でも、定植1か月以降に幼虫が発生する場合もある。

●ナモグリバエ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年寄生株率0.8%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・常発地では育苗期後半または定植時に薬剤処理を行う。
- ・葉に白点（産卵痕）や絵描き状の食害痕が多数見られる場合は、防除を実施する。

<その他の病害虫>

●すす枯病

- ・トンネル被覆後は、できるだけ換気につとめ、気温の上がり過ぎや過湿にならないように努める。
- ・発病株には多数の菌核ができ、次作の伝染源となるため、本ぼでは発病株は根を含め抜き取り、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

●オオタバコガ

- ・例年、11月末まで幼虫が発生するので、ほ場での発生に注意し、防除効果の高い若齢幼虫期の防除に努める。なお、育苗期後半または定植時に薬剤処理した場合でも、定植1か月以降に幼虫が発生する場合もある。

【イチゴ】

<生育の概況>

生育は、出蕾～開花初期で全体的には平年並～やや遅い。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・10月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は0.1%（平年1.5%）と平年に比べ発生は少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は並～少ないため、本病の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・育苗期に発生がみられたほ場では今後の発生に注意し、発病が少しでもみられたほ場では早急に防除を行う。

●炭疽病

予報の根拠

- ・10月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は1.5%（平年1.0%）と、一部の施設で多発していたため発生は平年よりやや多くなった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・本病は高温多湿条件で多発する。ビニール被覆後はハウス内の温度が上昇し、発病を助長するので、ハウス内温度の過度な上昇をさける。
- ・開花・結実による株への負担がかかると発病するため、発病を認めた場合は、直ちに発病株を抜き取り、

ビニール袋に入れ処分する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・10月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は3.0%（平年3.3%）と平年並の発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ビニール被覆後は、増殖に好適な条件となるので、発生に注意し初期防除に努める。
- ・天敵を利用する場合は、寄生されたアブラムシ（マミー）の発生状況をよく観察する。薬剤散布をする時は、天敵に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・10月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は6.5%（平年10.7%）で平年より少ない発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・近年多発生が続いており、寄生が認められた場合は少発生のうち防除を徹底する。
- ・天敵（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ）を利用する場合は、ハダニ類の発生状況をよく観察し、発生が多い場合には、天敵放飼前にハダニ類の密度を下げる。ハダニ類が増えた時は、天敵に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・10月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.7%（平年0.9%）で平年並の発生であった。フェロモントラップによる誘殺数は、平年に比べやや多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・11月は野外の気温が下がり、外からの侵入は10月に比べ少なくなるが、11月中はまだ侵入が見られる。発生初期の若齢幼虫期に防除を徹底する。

【トマト】

<生育の概況>

生育は平年並～やや遅い状況である。

●葉かび病、すすかび病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均発病株率は14.4%（平年13.2%）と平年並の発生であった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並～少ないものの、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する（本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度と比較的高温を好む）。

防除対策

- ・本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・多湿にならないように換気につとめ、過度の灌水を避ける。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに除去し、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。
- ・本県では、定植後から11月頃まではすすかび病が多く、次第に葉かび病が優先する傾向が見られる。

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.1%（平年3.5%）と平年より少なかった。ただし、病害虫防除員からは発生がやや多いとの回答があった。
- ・コナジラミ類の平均寄生株率は、1.7%（平年6.4%）と平年より少なかった。ただし、病害虫防除員からは発生がやや多いとの回答があった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の媒介虫であるタバココナジラミの発生を助長する。

防除対策

- ・発病株は伝染源となるため見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。
- ・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・タバココナジラミに対して以下の防除を徹底する。
施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。
新芽への成虫の寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年寄生株率1.0%）。
- ・フェロモントラップの誘殺数は、平年よりやや多く推移している。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・例年、11月中は成虫が発生するため、施設開口部に防虫ネットを設置し、侵入を抑制する。
- ・本種は中齢以降では薬剤の効果が劣るので、ほ場内での発生に注意し、若齢幼虫の防除に努める。

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年寄生株率0.1%）。
- ・フェロモントラップの誘殺数は、平年よりやや多く推移している。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・例年、11月中は成虫が発生するため、施設開口部に防虫ネットを設置し、侵入を抑制する。

- ・本種は中齢以降では薬剤の効果が劣るので、ほ場内での発生に注意し、若齢幼虫の防除に努める。

●ハモグリバエ類

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.1%（平年3.1%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生に適する。

防除対策

- ・施設開口部に防虫ネットを設置し、侵入を抑制する。
- ・葉表の白点（産卵痕）や初期の食害痕に注意し、発生初期に薬剤防除を実施する。

<その他の病害虫>

●灰色かび病

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率0.02%）。
- ・株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

【ウンシュウミカン】

<生育の概況>

生育は平年並～5日程度早い。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は1.0%（平年1.9%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・発生がみられる場合には、収穫前日数に注意して防除を行う。

<その他の病害虫>

●青かび・緑かび病

- ・10月中旬の巡回調査では、平均樹上発病果数は0.1個/樹（平年0.1個/樹）と平年並み、落果発病果数は0.3個/樹（平年0.4個/樹）と平年より少なかった。
- ・本病は果実の傷から病原菌が侵入するため、果実に傷がつかないように注意して収穫する。薬剤の選択にあたっては収穫前日数に注意し防除を行う。

【カンキツ全般】

<その他の病害虫>

●かいよう病

- ・10月中旬の中晩柑の巡回調査では、果実の平均発病度は0.2（平年0.6）と平年より少ない発生だった。病害虫防除員からの報告によると、県内全域でかいよう病は平年並～やや多い発生である。
- ・感染は11月以降起こらないが、冬期中に夏秋梢の剪除、防風垣・防風ネットの整備を徹底し、翌春の新梢への感染拡大を防ぐ。

【キク(露地)】

<生育の概況>

生育は平年並である。

●黒斑病、褐斑病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は11.7%（平年10.1%）と平年並であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年並～少ないため、本病の発生を特には助長しない（本病は特に降雨が続くと発生が多くなる。病原菌の生育適温は黒斑病24～28℃、褐斑病20～28℃と比較的高温を好む）。

防除対策

- ・発病株は次年度の伝染源となるため、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

【チャ】

<その他の病害虫>

●ナガチャコガネ

- ・幼虫は10月下旬～11月下旬にかけて、地表近くに上がってくる。うね間から雨落ち部を掘取り、幼虫が地表から20cmまでの深さに見られたら、薬剤の土壌かん注を実施する。

●チャトゲコナジラミ

- ・本種の発生は県内の多くの茶園に広がっており、巡回調査茶園すべてで幼虫の寄生が確認された。また一部にはすす病の発生が見られるような多発生茶園もあった。
- ・発生が確認されている茶園では、秋冬期に越冬幼虫を防除すると、来年の一番茶時期の成虫発生を少なくすることができる。
- ・防除は、チャトゲコナジラミに登録のあるマシン油乳剤を用いて来年1～2月に2回行うと効果的であるが、赤焼病の発生が懸念されるほ場では、年内に1回のみ防除を行う。その際、赤焼病の防除薬剤を先に散布し、1週間程度のちにマシン油乳剤を散布する。防除は幼虫の寄生が多い裾部の葉裏に薬液が届くように散布する。また防除前に裾刈を行うと薬剤が茶株内部まで届き、防除効果が高まる。

3 季節予報

(1) 1か月予報 (東海地方 平成28年10月20日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 10月22日から11月21日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。平年と同様に晴れの日が多い見込みです。向こう1か月の降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率60%です。2週目は、低い確率50%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	30	30	40
1か月	降水量	40	40	20
1か月	日照時間	30	40	30
1週目	気温	10	30	60
2週目	気温	50	40	10
3～4週目	気温	30	40	30

<予報の対象期間>

- 1か月 : 10月22日(土)～11月21日(月)
- 1週目 : 10月22日(土)～10月28日(金)
- 2週目 : 10月29日(土)～11月4日(金)
- 3～4週目 : 11月5日(土)～11月18日(金)

(2) 3か月予報 (東海地方 平成28年10月25日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 11月から1月

【予想される向こう3か月の天候】

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

11月 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

12月 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。岐阜県山間部では、平年と同様に曇りや雪または雨の日が多いでしょう。

1月 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。岐阜県山間部では、平年と同様に曇りや雪の日が多いでしょう。

【気温】

3か月			11月			12月			1月		
低	並	高	低	並	高	低	並	高	低	並	高
30	40	30	30	40	30	30	40	30	30	40	30

【降水量】

3か月			11月			12月			1月		
少	並	多	少	並	多	少	並	多	少	並	多
30	40	30	40	30	30	30	40	30	30	40	30

※ 参考資料

	平均気温 (°C)			降水量 (mm)		
	11月	12月	1月	11月	12月	1月
浜松	13.5	8.4	5.9	119	52	57
静岡	13.9	9.0	6.7	132	63	75
三島	12.8	7.9	5.7	107	55	74

*降水量は小数点以下を四捨五入しています。

1. 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めています。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--

平成 28 年度 技術情報第 7 号
病害虫名 オリーブアナアキゾウムシ

平成 28 年 10 月 26 日
静岡県病害虫防除所長

県東部地域でオリーブアナアキゾウムシが発生しています。
オリーブ栽培園では、発生に注意して下さい。

1 病害虫名 和名：オリーブアナアキゾウムシ（ゾウムシ科 アナアキゾウムシ亜科）

2 発生作物 オリーブ

3 発生経過及び状況

平成 28 年 9 月下旬に農林技術研究所 伊豆農業研究センターより、県東部のオリーブ生産ほ場で栽培されているオリーブが、株元に穴があり樹勢が弱くなったと、その被害株の地上部にいた虫が持ち込まれた。成虫の形態などにより、オリーブアナアキゾウムシによる加害であることが確認された。

本種はすでに静岡県内で発生が確認されているゾウムシであるが、経済栽培されているオリーブへの被害を確認したのは今回が初めてである。なお、県農林局農芸振興課によると、県内のオリーブ栽培は平成 24 年度から急激に増加し、平成 27 年度では 6.7ha まで拡大している。

また、平成 21 年 3 月に神奈川県において、経済栽培されているオリーブへの被害を確認したと、病害虫発生予察特殊号第 3 号が発表されている。

4 被害および寄主植物

幼虫がオリーブの幹の皮層と形成層を食害する。多数の幼虫が食入すると、若樹では枯死する。壮齢樹では、衰弱してしだいに着果しなくなる。幼虫の加害中は産卵孔から木屑を排出する。加害部は地際から 40cm くらいに集中するが、地際部も加害されることがある。成虫は新芽、葉柄、樹皮を食害する。

本来、ネズミモチ、イボタノキ等モクセイ科木本を寄主としていた在来種であるが、日本にオリーブが導入されると、こちらを選好するため、最も重要な害虫となった。

5 特徴

(1) 形態

成虫は口吻を除き体長 12～15mm、全体暗褐色、口吻の長さは 4mm 内外で腹側にゆるく湾曲し、先端は扁平。翅鞘には粗大な点刻列が 10 本あり、間室は隆起する。体表には灰白～黄褐色の剛毛があり、特に密生した部分には淡色に見える。老熟幼虫は体長約 15mm 内外で、無脚、頭部は茶褐色、胴部は乳白色で深い皺が多い。蛹は裸蛹で乳白色、体長 14mm 内外。

(2) 生態

本州、四国、九州、八重山諸島及び中国に分布。成虫及び幼虫で越冬し、成虫は 3 月下旬～11 月上旬まで活動する。日中にはオリーブの根元周辺の落葉、敷わら、雑草等の下で静止し、夜間に樹上で摂食、交尾、産卵する。地際部の樹皮に口吻で浅い穴を開け、その中に 1 粒ずつ産卵し、その上を粉状物や樹皮の細片で覆う。産卵は 4～10 月の長期にわたって行われる。卵期は夏期では 10 日内外、幼虫期は 2 ヶ月内外で、5 齢を経過し、樹皮から次第に幹の材部に食入し、蛹化する。成虫の寿命は 3～4 年

で、生涯産卵数は平均 200 個程度となる。

6 防除対策

- (1) 樹の周辺を周年裸地状態にすると、成虫の定着数が顕著に減少する。
- (2) 薬剤による防除では、スミチオン乳剤の 50 倍液を主幹に、4～8 月にかけて葉、果実にかからないように 3 回散布する。
- (3) 本種と疑わしい個体及び被害を見つけた場合は、農林事務所及び病害虫防除所に連絡する。



図 1 地際部の被害



図 2 幼虫



図 3 成虫

表 1 オリーブアナアキゾウムシの主な防除薬剤*

商品名	使用方法	希釈倍数	使用時期	本剤の使用回数	IRAC** 作用機構分類
アディオン水和剤	散布	2000 倍	収穫 7 日前まで	2 回以内	I : 3A
ダントツ水溶剤	散布	2000 倍	収穫前日まで	2 回以内	I : 4A
スミチオン乳剤	樹幹散布	50 倍	収穫 21 日前まで	3 回以内	I : 1B

* 静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準 (<http://www.s-boujo.jp>) より抜粋

** 世界農薬工業連盟 殺虫剤抵抗性対策委員会 (IRAC) による分類。農薬抵抗性の発達を回避するため、同一コードの薬剤は連用を避ける。

問い合わせ先：静岡県病害虫防除所 (TEL : 0538-36-1543)

病害虫防除所 HP (URL) :

<http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>

病害虫防除基準 HP (URL) : <http://www.s-boujo.jp/>